



医薬融合のシンボル—校章—について

本学の校章は、“学内から校章を”との熱意により、教職員学生からの応募作品の数点をアレンジして出来上がったもので、“医薬大”の文字を伸びゆく葉で円く包むことによって医薬の一体化、融合を象徴し、また、下には青春の杉の実がしっかりと大地を踏まえるデザインは、単純な中にも力強さと円やかさを表しています。特に杉をデザインしたのは県木である立山杉とキャンパスがある杉谷の地名になぞらえたものです。

校章の選定経緯を振り返ると、昭和51年春第1回生の入学とともに“校章制定を”との声が沸き上がりました。早速、学生委員会の中に校章選定委員会が設置(51.10.13)され、教職員学生を対象に医薬一体のユニークな大学にふさわしい校章のデザインが公募されました。このとき、立山杉、立山連峰、チューリップあるいは雪の結晶をあしらった作品など73点の応募があり、絵の専門の方の意見も参考に審査しましたが採用に至りませんでした。そこで、校章のモチーフを立山杉をアレンジしたものとし、「医薬」の漢字を入れること、抽象的なものより柔らかく味があって飽きのこないものを基本形とすることで、第3回生入学後の昭和53年初夏に再度学内公募が行われ、68点の応募がありました。前回の応募作品と併せて、上村 清、加須屋 實、涌井芳朗、畠山美苗4氏の作品をアレンジした現在の校章の基本形が出来上がりました。その後、昭和56年12月22日の学生委員会で中央

の漢字を横書きの“医薬”と縦書きの“医薬大”の二案が提案され、昭和57年1月29日の評議会でここに示す“医薬大”（縦書き）とする校章が制定されたものです。